

【研究ノート】

## 竹田春庵正徳度朝鮮通信使応接資料滙編並筭記(一)

石川 泰成

### 要約

福岡藩の儒者竹田春庵が1711年に来日した朝鮮通信使の使行員との交流に関する資料を、九州大学図書館・福岡県立図書館に所蔵する竹田文庫を中心に時系列に編纂し注記を付した。

Keywords : 正徳(辛卯)度朝鮮通信使、竹田春庵、貝原益軒、雨森芳洲、李東郭、奇斗文、朱子学

### 緒言

1711年(正徳元年)に朝鮮通信使が来日し、福岡藩では藍島を宿泊地として対応した。その際、藩命により竹田春庵が詩文応酬に当たった。竹田春庵のこの時の応酬に関する資料が竹田文庫(九州大学・福岡県立図書館)に収められており、当時の往路・復路、その後に渉る一連の資料群が残されている。論者は「1711年度朝鮮通信使と福岡藩儒竹田春庵との学术交流―竹田文庫所蔵資料を用いて論ず―」(朝鮮通信使学会『朝鮮通信使研究』第35号, 2023年, p.103~133, 韓国)において、製述官李瓊(号は東郭)との朝鮮儒学, 朝鮮陽明学に関して論じた。しかし竹田春庵と奇斗文との医学問答, 雨森芳洲との往復書簡等には論及できなかった。そこで本稿は、竹田文庫等の資料を中心に、時系列に並べ、資料自ら当時の状況を語ってもらう方法を採用した。なお紙幅の制限もあり、二回に分載する。正徳2年(1712)以降は次号に掲載予定である。『藍島倭韓筆語唱和』が精華とすれば、その下面に多くの枝葉が茂っており、唱和集と本資料滙編を併せ読めば、当時の様子が眼前に彷彿と浮かぼう。各藩が朝鮮通信使を応接するにあたり、藩儒たちの活動も同様なやり取りがあったと思う。本稿は、井上忠氏、川添昭二氏、高橋昌彦氏、大庭卓也氏の優れた先行研究<sup>(注1)</sup>に依拠し、諸賢が掘り起こされた資料を時系列に羅列したにすぎず、諸賢各位に感謝申し上げる次第です。今次、論者の筭記に採るべき一則でもあれば幸いです。

### 凡例

- 一、漢字は常用漢字を用い、和文書簡のカタカナはひらがなに、合字は開き、濁点、句読点を加えるなど通読の便をはかった。
- 一、九州大学図書館竹田文庫所蔵、福岡県立図書館竹田所蔵を略記し、そのあと史料番号を付した。例：九大176、県立36

## 1. 正徳元年（1711）辛卯

### 1.1. 7月22日以前 益軒，通信使の来航時期を訪ねる

#### (1) 「貝原益軒竹田春庵宛書簡」

…朝鮮人いつ頃来候や。藍島に貴公御出被成にて可有御座候。其内御筆訳、御唱詠など御草案可被成候。地理などは御尋被成間敷候。拙者などは退隱の事に御座候間、出候も如何に御座候。殊先年の如く御座候は珍人物も来申間敷候。…

〔筈記〕この書簡，九州産業大学図書館所蔵。書簡の発出時期は内容から7月22日以前と推定した。貝原益軒は弟子の竹田春庵に注意事項などを与えている。ここでいう先年とは天和二（1682）年の朝鮮通信使来日のことを指す。竹田春庵は，製述官成琬（号は翠虚）と詩の唱和を行い、『春庵詩稿』（県立3366）に七言絶句二首を取めている。

### 1.2. 7月22日 益軒，春庵の詩・文章を添削

#### (1) 九大93－444「益軒書簡」

昨日□□後日藍島御渡被成□節風穏候ひへしと□□韓客へ御示訓被成候芳唱等明今致緩覧候。御佳作殊宜相見申候。非諛言候。任御望少々加点竄候。然共自前年数々盛作御示之時申候様御見合被成と存候而も宜方に可被成候。

一 日本の事弊邦とは如何存候。筑前之事は弊邦可然候。

一 一貼の事中夏之書に而一服を称、一貼之事有之候や覚へ不申候。御考可被成候。一貼とは本邦之俗称に而は無御座候や。膏薬などは一貼と可申候。それは一つけ申意候。

一 正伝曾改大方十分取一云々之説及水盆重約計半斤之説出乎或問候や。何之条に而候や被仰聞可被下候。

一 韓客に問申度事御座候。今明日若書了不申候はば、吉エ衛門殿御留守迄成とも遣し可申候。明後日は何時御乗船可被成候や承度候。

一 神屋弥左衛門才学之事御序若御座候はば、正大夫殿にでも被仰入可然候。其内被懸御目申間敷候。御首尾能御仕廻頓而御帰所希御座候。…

七月二十二日

〔筈記〕井上忠（1959）p.134～135に翻刻。添削した原稿は以下1.3.（1）であろう。

### 1.3. 7月27日ごろ 藍島で添削原稿を受け取る

#### (1) 九大175「貝原益軒添削原稿」

〔筈記〕竹田春庵は7月24日藍島到着。この原稿の欄外および行間の添削は，筆跡から，貝原

益軒によるものと思われる。詩については、上記 1.2.(1) の益軒書簡で述べたように、欄外に批評を書き、行間に添削を施す。欄外の益軒の評に「弊邦当作本邦。一貼是一服之異称歟。未諳記。中華之書亦称一貼乎。」と疑問を呈する。

#### 1.4. 7月28日 春庵，事前準備を行う

(1) 『藍島記』7月28日

○神や弥左衛門未着。…官人来朝之時、学士もし対撰あるべきやと宿構。

謹問

製述官洪公及諸君

烟 層

天実依之

洋漠万里滄波万重星澹遠□文旆抵此 伏以台候清穆实依天春 正是两国之慶也。 謹賀

辛卯仲秋春庵竹田定直

定直謹問

希觀文国光華当

洪公閣下僕問聞 星使将入本邦、夙来此地、日望清旌南指、頃聞邇聞

閣下曾□擢

文衡之選、再遊通信之聘。僕於是喜而不寢、膽（瞻？）仰弥切。

閣下昔年南游文唱扶桑、兒童慕風草木知名、僕当時辱蒙議副握荷□度感載深中心藏之。必懷

光霽寤寐、思服所恨、天限南北、地阻山海明、河塞作懸、望参商量、豈期再会。幸今日遇未了之縁、獲復諧風觀、真可謂奇遇也。喜候欣喜之至、茲不自瑞、呈小詩一章、以鄙烟賜莞納、幸伏乞斤正。

仙槎再見旧時賓・青眼依然情益親、為春楓階攀月桂、文里揚耀照殊隣

竹田定直拜

慕陪

館下辱蒙書、脱豈堤欣扑設、呈一絶以代訳舌

曾慕殊方文物昌 幸逢龍節入扶桑 交隣修好太平日 勿厭梯航道路長

奉呈某公

万里乘槎志気雄 壮游持効夷堅功 海□□影隔霞湧 鳳觀争先仰徳風

又

長風□自退星槎 □旆□□藍島□幸

得白□衣陪館下 照人事采浄無陬

謹稟

諸公

漫投木瓜辱賜□□實是伝家之珍□備朋之金今日旌□ 千載一遇不慮諸公因厭淹為遲留今□吉別  
去始期歲旋再執謁於地□□會之有繼余暑未少入為送珍重

奉問

□官某公

本邦所修合藥劑、極服□□瘡□□□改古□□□命一、其劑一貼重約五百錢至十余錢、如今本邦  
所修合、則又以其一料作十貼或七八貼、今所用一貼、売数大約□一錢余未知

本邦所用藥劑一□中并之制耶、抑有増摸耶、且正伝云、水一盞重□計半斤。

本邦煎藥用水亦依此法耶、用姜□□幾何、凡生姜一片云者、其闊及厚幾何、且其重数幾何、希  
不厭煩勞辱賜貴喻厚荷鴻慈。

… (中略) …

○正林頼之藥劑之事演説、〔竹森〕平左衛門則朝鮮にて藥用之由、委細物語也。○朝鮮医診診  
脈…製法は高麗茶碗よほど大なる者爰元にあるこい茶はんすといふ物の大てい大きさと□答。  
其茶碗に水一盞□入口に煎じ、…姜一片の大きき (割注 長さ一寸許、厚□、幅□) ばかり、  
厚一分余…

○今度対馬殿供に来る書生兩人雨森藤五郎・松浦儀左衛門、通華音、通韓音。○朝鮮讀書音読  
之由。…

〔筈記〕『藍島記』は、川添昭二（1984）p.354～366に翻刻あり。以降、引用は煩を避け月日  
のみ掲げて、ページ数は掲げない。7月28日に竹田春庵は閑暇を得て、詩や書簡の予稿を用意  
した。詩に付す詩序に当たる部分は、後日ほぼそのままの形、或いは一部を利用する形で活用。  
竹田春庵は、今回、医薬に関して事前に対馬滞在経験のある対馬藩士（博多蔵屋敷留守居役）  
竹森平左衛門、医師の正林頼之にも話を聞いている。なお貝原益軒から指摘された「一貼」に  
ついては変更せず。この時、正林頼之に再確認したものか、上関の医師小泉玄碩の処方（『宝  
暦・文化年中朝鮮通信使来帰『御用医師小泉玄碩日記』（上関町教育委員会、2000年、p.191～  
202）に貼と包が同義の記載があり、当時の医家では普通の用語であったか。

### 1.5. 7月30日 神屋松堂、藍島到着

(1) 『藍島記』7月30日

神や弥左衛門着。…

〔筈記〕今回、福岡藩の詩文応酬に従事する神屋松堂が到着。このほか、後略部分に、三使の  
官職氏名の情報を得たが、正使は超泰億（平泉と号す）、副使は任守幹と記すべきところ、正  
使の氏名李濟、副使を仁守韓と誤って伝わる記述あり。

### 1.6. 8月6日 春庵，通信使への質問事項の原稿作成

(1) 『藍島記』8月6日

いせ田より唱酬集かりに来る。二冊遣、詩来。…

僕嘗読退溪先生書、爲其学純粹敬服尤深。且聞貴邦退溪之後、不乏其人、可謂濂洛学脈已東矣。明儒除丘瓊山・薛敬軒等数輩之外、多好異術奇妄誹程朱之言、所謂操戈入室者也。但至觀邇年所航華書、則其書較平□（穩）、非明末後著諸儒之風、雖間有程朱不合者、其說還多所發明。不知貴邦目今諸儒一從程朱以為宗耶、或尊陸王或立新說以作一家之学者亦有之耶。

且華朝儒所著四書註翼航于本邦者、至充棟汗牛、然偶好書者蓋希矣。俗尚以蒙引存論。□□所書為要聞於中華亦然、往々義之為作俗書、朱註之外以何書為專要耶。且貴邦邦儒先所著經翼有何書耶、請賜垂諭厚蒙鴻慈。…①

燕山松庭朱世傑所著算学啓蒙、刊行于本邦四十年前有横川玄悦者、始讀之通其術、弊邑人星野実宜者相味也。□□天元正負算術之法、因為天下之妙術伝言、此書出貴邦果然否。…②

曆日用中朝之制耶、抑貴邦別有官曆耶、嘗聞中朝、今所用時憲曆然否。…③

本朝所奏正学、多伝来中朝者伝言漢唐古楽也。中朝今變作新、写而古楽不伝、而本朝所用古代之遺制也。亦有自貴邦伝来者□之高麗楽如延寿楽、地久楽、納曾利等曲調尤多、有管箏、糸革奏之。貴邦今所用名果然耶。…④

〔筭記〕竹田春庵が、来日前に質問事項を決めて、その下書きを作ったもの。このうち①は、内容を整理して、往路8月19日に質問している。②，③，④の内容は、復路に質問する予定であった。

### 1.7. 8月19日 詩会

(1) 『藍島記』8月19日

久兵衛殿より状来る。

○夕飯後吉右衛門殿より手紙来、韓人筆談望之由にて罷出。神や同道暮方出る。喜内、雨森東五郎よび来る。とくと相談可仕由、藤五郎知人に成。先容にて学士舎に入。其前揖礼習再揖也。唱和控記、酒呑童子大江へ酒入合手来。茶碗にて台にすへ李学（士）に遣、又其茶碗にて酌。芳洲に進、又拙者に進。其後、洪鏡湖、巖龍湖、南泛叟へ進。○玄判事来、崔同知も来、…

〔筭記〕酒を持参し、酒を酌み交わしつつ詩会が行われたことがわかる。後略部分には朝鮮の漢文直読の方法、詩の唱法、平仄の記事もあり。

(2) 九大3772・3773 『藍島倭韓筆語唱和』 1丁b

十九日、初造賓館、謁朝鮮学士及三書記（各相再揖就坐）。対州儒士雨森芳洲為先容、書生桂洲・春洲等在座筆語唱酬、及闌更而辞去（亦各相再揖）。…

旧稿有平出掲書者或空字者。今悉連書焉。詩章問答具名皆紙尾。今並移之題下以便觀覽。韓人多以別号書之。具名下旧有拝稿・拝具等字、今並除去以從簡約。

〔筭記〕福岡藩側からは竹田定直（春庵と号す）、神屋亨（松堂と号す）、対馬藩の雨森東五郎（芳洲と号す）、塩川伊右衛門（春洲と号す）、和瀧正蔵（桂洲と号す）らが同席。

(3) 九大3772・3773『藍島倭韓筆語唱和』1丁b～17丁a

〔筭記〕この唱和集に載せる漢詩と竹田文庫に収める自筆詩稿類の現存状況を照合して以下に載せる。なお大庭卓也（2006）に、自筆詩稿等の釈文、語釈、解説がある。

1丁b～2丁a李磻（東郭）の名刺…県169李東郭自筆詩稿

2丁a洪舜衍（鏡湖）の名刺…県166洪鏡湖自筆詩稿

2丁a～b嚴漢重（龍湖）の名刺…県165嚴龍湖自筆詩稿

2丁b南聖重（泛叟）の名刺…県167南泛叟自筆詩稿

3丁a竹田春庵の筆語「倭示」…九大175貝原益軒の添削付き詩稿

3丁b李東郭の答「韓客」…県168李東郭自筆簡牘

3丁b・4丁a春庵から諸公への詩「奉呈学士李公洪鏡湖嚴龍湖南泛叟諸公」…九大175益軒添削の詩稿、『藍島記』7月28日にこの詩の準備有。

4丁a李東郭の和韻「即席奉次春庵詞伯惠賅韻」…竹田文庫に自筆詩稿なし

4丁a洪鏡湖の和韻「奉和春庵詞伯」…県163洪鏡湖自筆詩稿

4丁b嚴龍湖の和韻「春庵詞伯既辱枉顧又眎佳什甚盛意也、敬次以呈」…県162嚴龍湖自筆詩稿有り。

4丁b南泛叟の和韻「奉次春庵詞伯韻」…竹田文庫に自筆詩稿なし

4丁b～5丁a南泛叟の和韻「更次春庵韻」…県161南泛叟自筆詩稿

6丁a～b竹田春庵筆語「倭示」…九大175一部語句を採用。

6丁b李東郭筆語「韓客」…九大115李東郭筆語原稿有り。

6丁b竹田春庵筆語…九大175春庵の事前原稿の語句を一部利用。

6丁b～7丁a李東郭詩稿…県153李東郭自筆詩稿有り。

8丁a～b洪鏡湖「奉贈春庵松堂両詞席」…県164洪鏡湖自筆詩稿有り。

9丁b南泛叟「次桂川韻奉春庵松堂要和」…県158南泛叟自筆詩稿有り。

(4) 3772・3773『藍島和韓筆語唱和』16丁b～17丁a春庵「謹問」

謹問

僕嘗読退溪先生書、知其為粹美之真儒、敬服尤深。其他如陽村・晦齋等諸先生亦已見其書、而知其為人。且聞爾後繼作不乏其人、可謂濂洛学脈已東矣。明儒除丘瓊山・薛敬軒等数輩外、多是好異術奇妄誹程朱、所謂操戈入室者、恐難信從者焉。及觀邇年所航華書、則其書較平穩与明

末諸儒之風稍不同。雖有一二与程朱不合者、還多所發明。不知貴邦目下今儒一從程朱為宗耶、或尊陸王或立新說作一家之学者亦有之耶。方孝儒（孺？）謂違朱子不背道、不知尊意以此言亦為有理否。更問明儒所著四書註翼極多、而其遇好書尤希矣。独以大全蒙引存義淺說等数部、称巨擘。然近儒往々議之作俗書、如呂晚村・孫詒仲等輩強弁其誤。敢問欲講習四書者於朱註外看何書正佳。不知尊意為如何。且貴邦儒先所著經翼有何書耶。僕未得見之為深憾。幸示書目、希後探索快一覽。統祈無吝清誨、恭賜垂諭、厚荷鴻慈。

辛卯仲秋

〔筭記〕『藍島記』8月6日に「謹問」の準備原稿があり、19日に提出したこの書簡までの推敲の跡が窺える。春庵はこの書簡で、①丘濬（号は瓊山）、薛敬軒以外に読むべき思想家がないこと、②近年は明末の反朱子学（陽明学派）の風潮も収まり、幾らか朱子学と違って、益するものもある（呉廷翰らを指す）と述べ、③朝鮮朱子学が朱子学を正学としているか、④陽明学者の有無、⑤方孝孺の「違朱子不背道」（出典：「題大学篆書正文後」、『方正学文粹』巻5所収）に対する見解、⑥呂晚村・孫詒仲ら清朝の朱子学の評価、⑦四書集註の再注釈書について、などを質問している。石川（2023）参照。

### 1.8. 8月20日

(1) 『藍島記』8月20日

明日之和、雨森へ渡、…東五郎へ五法塩六拜。すまき二台にすへ遣。

〔筭記〕『藍島倭韓筆語唱和』9丁b、10丁aに事情を示す記事と詩あり。下の（2）冒頭から、春庵と松堂の「和章二首」を受け取っていることが分かる。

(2) 雨森東五郎（芳洲）書簡

尚々和章二首早速伝達可仕候。以上。

華翰忝拝見仕候。如仰、昨日は初而接光範珍重奉存候。韓客之御勝会、今日に至候而も、盛作佳妙之段、為申聞、私に至候而も大慶之義奉存候。御文章之義、取分贊嘆仕候而、御返答も大形出来仕候。定而今夜中には清写可仕哉と奉存候。今日は旅寓御尋被下之由忝奉存候。私義も今夕は折節少暇を得申候に付、何とぞ得寛談度奉存候而、御旅宿之義、竹森平左衛門に相尋、参島仕候処、御船に被成御座候由、承之罷帰申候。何とぞ明日も滞留仕候はば、寛々得貴意度奉存事に御座候。神屋老兄昨夜も御病中に御座候へども、押而御出被成、今日も御不快被成御座候由、乍慮外無御心元奉存候。先可申上候はば不存寄蒙嘉貺、不堪感戢之至奉存候。猶明日期貴面御礼旁可申上候。以上

八月廿日

〔筭記〕川添昭二（1984）（中）p.351に翻刻。この雨森芳洲の書簡から、竹田春庵の質問書簡

が、「御文章之義、取分賛嘆仕候而…」と、朝鮮通信使側に称賛され、李東郭が早速返事を作成中であることが分かる。副使仁守幹『東槎日記』によれば、春庵の詩は評価しないが書簡で展開した儒学と明末諸家の説に「叙致頗有可観」（復旦大学出版社『朝鮮通信使文献選編』第3冊，p.168）と高く評価している。

(3) 3772・3773『藍島筆語唱和』11丁a～b

〔笥記〕李東郭詩稿「春庵座下」…県立156に李東郭自筆詩稿有り。

### 1.9. 8月21日 詩会

(1) 県36「李東郭自筆尺牘」

復春庵詞伯書

示諭多少謹領会、而奉玩以還、有以見足下慕賢求道之誠、溢於言語之外、不道歷風波数千余里之險、得聞此言於昏塾憤憤之中也。僕以章句末学未嘗薰陶於先輩臯比之座、諛聞淺見固不足以發揮微奧、而亦生長於鄒魯之鄉、聞諸老先生伝道之序頗詳。試举平日耳剽者塞足下盛問也。我国自素車既東之後、道学大闡礼義始明。可一變至魯、而麗朝圃隱鄭先生以生知篤実之資、承先儒既絶之緒、倡明吾道毫髮尽折。其所註解經伝、一与朱夫子訓釈之文暗契懸合。則見識之卓、学問之奥可知矣。及至我聖朝尤有大焉、真儒蔚然輩出指不可勝俦。若寒暄堂金先生宏弼・一蠹齋鄭先生汝昌・静庵趙先生光祖・晦齋李先生彦迪・退溪李先生滉・栗谷李先生珥・牛溪成先生渾・沙溪金先生長生、或親炙而聞其道或私淑而伝其学、以貴王賤霸、正其路頭、以繼往開來為其己任。在山林則沈潜窮格益致涵養之工、処朝廷則展布素蘊挽回堯舜之治。其生質之美学力之篤卓乎無以容議而亦豈非我列聖培養之效有以致之也欤。足下所謂道脈已東者真実地語也。惟我諸老先生語黙動静、一以程朱兩夫子為繩墨、非其道不措也、非其書不説也。王陸兩儒之学統既与程朱異趨、則学程朱者其可尊尚之耶。萬々無此理也。我国尊聖学斥異端、甚嚴且截。至於場屋試士有用莊老語者必黜之、不許入選。則豈可容曲学拘儒倡鼓邪説於其間、爲吾道之蠱賊而莫之禁乎。皇明群儒丘瓊山・薛敬軒若而人外其見理立言固無可取。則雖衆喙争鳴群舌乱譟、適足以見其不自量也。其所以疵毀者亦何損於吾朱夫子也。尺霧障天難掩太陽之明、則付之於過耳之風声而已。此輩若生於皇明太祖之世、則亦必杖之廟堂也。足下所謂還多所發明者、未知何所拋而発耶。愚不能無小疑於足下心上之涇渭也。方正学所謂「違朱子不悖道」者、驟聞則不能無聽瑩者、而有明諸儒中正学之論議最正大、非可論擬於以秦檜為宋忠臣之瓊山、則夫豈有一豪刺晦翁之心哉。蓋以天下之義理無窮深蹟於師説之外者、亦無妨於尊崇先儒之道故也。然使朱夫子論古聖人、則亦必無此等説也。明儒所著『大全』『蒙引』『存疑』『浅説』等書不待呂晚村・孫詒仲輩強弁而已、自知其謬妄、故未聞我国諸先生以此等諸書置之於元上。雖汗牛充棟何用哉。蓋学問自義理中来者、而義理只箇在人腔子裡也。孔孟之世何嘗有許多書籍、而孔孟之道德与天地



同。濂洛群賢之時亦何嘗有訓詁之文。而自得於心者質千聖而無疑垂百世而為範、則学文之工不在於文字之末者明矣。足下不以自家之心為師、而求之於訓詁之文、則終不免為隔靴庖痒之（皎？）矣。然讀書亦所以資多聞而広其智也。先読小学以知洒掃応対之節、次読大学以知修齊治平之目、然後淹熟論孟六經諸書、究其大義、參之以濂洛群書、以成一家之学、則吾儒之能事畢矣。何患乎見道之不明也。我東諸先生所著義理之文多不可尽記。而居相尤溟渤間之恨不得対床譚討而確之也。惟足下諒之。

辛卯仲秋下澣 三韓学士東郭

〔筭記〕 同文章が『藍島倭韓筆語唱和』16丁a～19a、『春庵文稿』六にも収載。8月19日に春庵が呈した質問に李東郭が答えた書簡。大要は、①朝鮮朱子学の系譜を説き、李東郭がこの当時、未だ文廟（孔子廟に從祠）されていない金長生を掲げ、彼の思想的立場を示している（石川2023）。②陽明学が朝鮮においては、ほぼ異学の扱いであること③丘瓊山・薛敬軒以外の明儒について春庵が「還多所發明者」というのに対し、李東郭は「未知何所拋而發耶」と否定。④春庵が提起した方孝孺（号は正学）の「違朱子不悖道者」については、李東郭は異見がある。⑤清初の儒学者については、朝鮮の儒者が彼らの本を机上に置いているのを見たことがないと述べ否定的立場。⑥春庵が明代、清初の朱子学解釈の良い注釈書を求めることに対して、隔靴搔痒の弊害を免れないと春庵を批判。

(2) 九大3772・3773『藍島倭韓筆語唱和』20丁a～22丁b

〔筭記〕 8月21日の詩会の朝鮮側の詩稿が竹田文庫に以下の通り保存されている。

20丁a 李東郭「春庵詞伯乘夜來訪仍贈一絶即席同次」… 県152 李東郭自筆詩稿有り。

20丁a 李東郭「又奉春庵」… 県155 李東郭自筆詩稿有り。

20丁a 李東郭「春庵座下」… 県157 李東郭自筆詩稿有り。

20丁b 洪鏡湖「再疊録奉春庵」… 九大114 洪鏡湖自筆詩稿有り。

21丁a 南泛叟「再次」… 県159 南泛叟自筆詩稿有り。

21丁a 南泛叟「三疊」… 県160 南泛叟自筆詩稿有り。

21丁b 春洲「奉次春庵芳韻奉呈座上諸公」… 県172 春洲自筆詩稿有り。

このほか、雨森芳洲『縞紵風雅集』（関西大学東西学術研究所資料集刊11-1、関西大学出版・広報部、p.205、昭和54年）によれば、李東郭、巖龍湖が今村義勝少年、田中久勝少年に贈った漢詩を載せる。

(3) 『春庵文稿』6「問奇斗文」

示良医

春庵

良医姓…（略）…

初接芝眉若旧相識、誠如所論適有鄙問欲以煩高明。録左本邦薬劑極少。大抵以中華薬餌一劑十

分為一貼、煎藥水亦用小碗准之。此以吾邦人多腸胃軟脆不堪受大服也。不知貴邦藥劑一依中華之制耶、且用生薑其云一片者、其厚濶？以何為準、其重數幾何於中華方書未見其的量、請不憚煩勞、賜教諭幸甚。

〔筭記〕同じ文章が『藍島倭韓筆語唱和』（22丁a～b、「示良医」）にも収載。先に見た通り、春庵の準備原稿、貝原益軒の添削メモ、『藍島記』7月28日の準備原稿があり、ここに到る形成過程が看取できる。

(4) 3772・3773 『藍島倭韓筆語唱和』22丁b～23丁a

答

嘗百軒呈

今乃冒參於騷壇之未望見騷人之風度矣。欲知用藥之理、生雖昏何不傾懷於君哉。昔名医張仲景製小柴胡湯、用半夏・生薑・黃芩之法、生薑畏半夏、半夏惡生薑。彼畏我惡、各逞其能、此治病之妙法。凡湯藥南星半夏多、則生薑五片、雖無半夏欲有安胃散之病、則生薑三片百藥各有君臣佐使、用藥分数少、煎水亦少、邪氣有余之病、何行於經絡肌表、以逐邪氣哉。萬薪失火不能以一盃之水救之也。是故中原之用藥與東華無異也。管見如斯未知是否。一片則生薑半朶以刀斫破三片也。一片在其中矣。○生薑多水則重、少水則輕。或採之、日近則重、遠則亦輕、不用。○生薑切片円木之鋸伐作板。

〔筭記〕小柴胡湯の生姜の用法と効能を朝鮮医学の用法で答えている。また中国の用薬と朝鮮の用法には違いがないと答えている。ショウガの切り方や水量など細かな回答は、春庵が今回、最も気にかけていた項目である。

(5) 『藍島記』8月21日

○夜よびに来、罷出筆談。昨日七言律之再和并筆問の答、藤五郎より其前受取。神やは不出。○良医に逢、筆語あり。生姜の事、通事にて猶委細に問。筆語に半朶とかきたる事、生姜三朶あるを切わけ、一朶をとりて縦に片、それを三にわりて一つを一片とす。なぜに一朶とか□やと問。一朶といへば生姜一塊にうたがわし。半朶とかきたれとも、此一つの事也。生姜に大小あり、如何といへば、人にてても大小あり、大にしても人一人、少（小？）にてても人一人也。大抵中等を用てよし。大小に拘はらず。

〔筭記〕生姜をめぐる問答は、書簡のみならず、通訳を入れて事細かに説明を受けたことが分かる。その通訳の説明を漢文に直してメモとして書き込んだと思われるのが次の資料。

(6) 3773 『藍島倭韓筆語唱和』24丁a～24丁b 欄外及び行間書き込み

〔欄外〕訳人問半朶。□半朶ハ謂一□之角ヲ、不書□而書半朶以疑於全塊也。亦依訳人伝之。

〔「亦輕不用」の行間〕此言生薑難以輕重為？定、依訳示此意。

〔「円木之鋸伐為板」の行間〕此言斫□生薑者、縦斫用之、不是横切、亦已依訳示之。

〔筭記〕前条の『藍島記』の該当の内容を漢文にして書き込んだもので、まだミセケチなど推

敲の痕跡が見られる。なお3772『藍島倭韓筆談唱和』にはこの書き入れなし。

(7) 3772・3773『藍島倭韓筆語唱和』23丁b

再示 春庵

辱垂諭詳悉平生所疑氷積、何幸遇高明之盧医、聞所未聞、無任感謝。

〔筭記〕日本の漢方医学が、理論や処方を中心として中国・朝鮮のものに依拠していたが、水量、生姜の切り方や分量のような初歩の事項でさえ日本、朝鮮の間で異同がある。朝鮮通信使との医薬方面の交流が大きな成果をあげた。京都大学富士川文庫の医薬関連筆談唱和集にその一斑を見ることができ、ビィグル・マティアス『近世・近代期筆談記録が語る東アジアの医学・学术交流』（汲古書院、2021年）には医薬交流の実際が論じられている。

(8) 3772・3773『藍島筆語唱和』23丁b～24丁b竹田春庵「示」

示 春庵

今宵再会天仮良縁、更荷汪度、且賜瓊琚之章、感謝無已。前夜以鄙問煩高明、忿々之際、蒙清誨、詳悉闡明、足以發蒙、豈不服膺乎。雖略依訳人通此意、感載之深、再奉筆謝耳。七律高和亦入手。莊誦數四當什襲而蔵也。即今告別去發纜在邇、離情難禁、姑期榮旋再執謁於此地。秋涼屢至為道珍重。

〔筭記〕九大175の事前準備メモの字句を用いている。

(9) 九大111李東郭「答」自筆原稿

答 東郭

今人居數百里之内者終身不一面者有之。俺与足下隔在五千余里之異国、声聞何曾相及。而邂逅於客間岑寂之中、譚討兩宵情厚蒙密。豈非所謂三生未了縁者耶。昨蒙辱問尤覺足下高明之見優入学問上第一実地、良用感歎。僕之帰期未知的在何時、而經過此島之日、或有再見之便耶。臨別自不覺悵悵。

〔筭記〕3772・3773『藍島倭韓筆語唱和』24丁a～24bに同じ文章を載せる。

(10) 3772・3773『藍島倭韓筆語唱和』24丁b「奉訪春庵公不遇」

芳洲（春庵割注）雨森藤（ママ）五郎○此詩昨夜所作、即今席上書示。

〔筭記〕県53に雨森芳洲自筆詩稿有り。竹田春庵と雨森芳洲は今回の朝鮮通信使の藍島滞在中で初めて知り合い、この後も交流が続いた（川添昭二（1984）（中）p.351～357参照）。

(11) 3772・3773『藍島倭韓筆語唱和』25丁a李東郭「謝春庵芳洲再訪」

〔筭記〕県154に李東郭自筆詩稿有り。

## 1.10. 8月24日 写字官との筆談・唱和

(1) 3772・3773『藍島倭韓筆語唱和』28丁b～29丁a雨森芳洲「藍島述懐」

〔筈記〕 県115に雨森芳洲自筆詩稿有り。

(2) 3772・3773『藍島筆談唱和』29丁b李貞谷「謝呈春庵詞案」

〔筈記〕 県173に李貞谷自筆詩稿有り。

(3) 『藍島記』8月24日

…船に帰り久平申談、今日可罷出由、又小やへ出。藤五郎に逢。学士に逢和韻出す。弥左衛門八景之詩出す。久平よびに遣。次官小やにて貞谷・花庵に逢。錦谷も来る、海峯も一座也。貞谷・花庵共に李氏写字官也。緩筆也。唱和あり。正大夫殿より雨森へも久平同道にて行。暮歸。…○貞谷・花庵に示詩。

〔筈記〕 中尾宏・許芝銀「朝鮮通信使の編制一員役と座目一覧」(『研究紀要』第11号, 世界人権問題センター, 2007年)によれば, 李貞谷, 名は寿辰, 花庵は, 姓は李, 名は爾芳, 華庵と号し, いずれも写字官。

(4) 3772・3773『藍島筆談唱和』29丁b~31丁a

謝呈春庵詞案 花庵

仙客南来駕紫烟、相看風韻迥飄然、慙慙遺我瓊瑀什筆下能参造化權

辛卯仲秋

此日伴横田誠齋入上官舎、謁写字官李貞谷・李花庵、觀其書法。芳洲為先容。貞谷・花庵各写数幅、誠齋亦揮筆於韓客之前、来觀者多矣。錦谷・海峯亦在座並善書。以誠齋所写具三使相前、使君褒賞之、使錦谷伝其意焉。先是誠齋以所自写独樂園記寄示韓客。芳洲伝之、龍湖題数語以贈之。語録左。

觀此筆法優入三昧、妙年絶芸足擅一代。

龍湖

〔筈記〕 29丁b「謝呈春庵詞案」の作者について、春庵は花庵とするが、雨森芳洲『縞紵風雅集』(関西大学出版・広報部, 1979, p.39)は貞谷とする。今、春庵に従う。

### 1.11. 8月26日以降 通信使, 慈島へ

(1) 『藍島記』8月26日

廿六日 韓船發纜。

(2) 3772・3773『藍島倭韓筆語唱和』32丁a

…外有春庵再問李東郭書・贈南泛叟書、未及寄致而韓船已發慈島、姑埃北歸耳。

〔筈記〕 通信使船が地島(慈島)に停泊中と知った竹田春庵は、急ぎ李東郭との学術に関する再討議の書簡と南泛叟宛ての質問書簡を送ったが間に合わなかった。その2通の書簡は、以下の(3), (4)である。

## （3）九大3365『春庵文稿』六「再奉東郭公案下」

## 再奉東郭公案下

為学之道問之弗知弗措也。昔日教諭深切者明委曲諄悉、豈敢不拳拳服膺乎。然猶有一二疑条陳左、以冒高明願不金玉爾音更賜回諭、何幸如之。僕向莊誦教示剝？審貴邦聖学之隆昌、規模之正大、鉅儒碩才多、綿々歷々相統、□□□□盛哉。使人感激興趣於千里之外焉。昔時圃隱先生奉使吾邦寄遇本州大宰府已勤、口碑聞其為其人亦已旧矣。且觀『東国通鑑』所載、知其為東方理学之祖。如圃隱集則雖嘗航吾邦、其書極希、未得之見深以為憾矣。不知先生解經之文見集中耶、抑別有所著而伝耶。幸示及焉垂諭。学問当求於心数語極服洪教且承明季諸儒之經解、貴邦諸先生所不取也。高明之見可謂卓爾矣。豈可不信從乎。但初学欲看朱註者於文理不能通暢、則多先入門路頭、故前問及此耳。所論方正学之論尤敬服焉。丘瓊山論秦檜既以為其罪通乎天而於岳飛之死、則謂非矯詔於和虜之議、則称于宋有再造功、其於檜似有所回護、其論固可怪焉、亦恐可謂千慮之一失耳。正学忠誠貫金石千載如存學術之正、实践之厚、誰敢不嘉尚乎。然瓊山尊信程朱著『学的』『家礼儀節』『大学衍義補』等書、其有功於斯学亦可以為偉矣。薛敬軒極崇許魯齋、以為朱子後一人、然後儒往々議之、未知魯齋之出处其可否、於尊意為若何。正学違朱子不背道之論、僕未以為非今聞高明之說。益信其所信正学已謂朱子不背道、朱子所取也。觀朱子所取也、一語則其尊朱子者、而非刺之者、固可知耳。正学從『大学』古本不用格致補伝、故發此語、其不用補伝者吾不取之也。退溪先生已弁其非、如中朝諸儒亦往々弁之。然至違朱子云々語則未必不為是也。僕窃謂其於程朱之說或偶同、而其學術相異者有之。如陽明是也。蓋陽明尊明道取朱子、其說相合者頗多矣。然其学則偏曲者也。此其說間同程朱而其道相悖者也。其言或不同而其道相同者有之。如朱子於程子是也。朱子解易解論語、与程子相異者甚多矣。然程朱学脈同轍、初無容其議者、朱子於張子亦然。皆是其言雖異、其道相同者也。故學術之異同在其大本處、而非在一二言句上之異同。正学所謂違朱子不背道者亦恐此之謂也歟。僕向所謂近儒有所發明者亦此之謂也耳。非放在朱子從近儒也。僕碌々庸人、於問学上、未有觉悟一路、於德性上、未能履行寸地、所謂四五十而無聞者、先聖所棄也。然所幸知斯道可尊而慕賢之志未衰。今遇高明君子希弁疑惑、再歷陳区々所思、仰祈是正而已。不堪慙懼之至、千萬慈警。

〔筭記〕李東郭に対して再度の質問した書簡。秦檜をめぐる評価問題、方孝孺が言う「違朱子不背道」等について春庵の意見を開陳したもの。

## （4）九大3365『春庵文稿』6「奉泛叟南公案下」

## 奉泛叟南公案下

僕蒙識荊後一日、偶過從事君（官？）舎前、觀玄判事写字、足下適在座間把毫書示、以吾邦尊程朱亦如貴邦否、為辱問。僕當時以有国禁不許私用筆硯、故不能奉答、敢辞去焉。其前後足下和鄙詩云先子乘槎際世昌云云、幾撫遺蹤涕淚、長莊誦数回、吟玩無已。但覺辞氣清婉語意悽愴、

而未知其所以若何所謂先子者為誰也。當時煩多事不遑奉問、以為歉耳。幸今告示其詳焉、至吾邦尊程朱之清問、則足下崇道樂善之□□、於邂逅之際忽見言表、敢不嘉尚乎。夫貴邦儒術之正、聖學之盛、嘗聞其槩、頃於李學士之教諭、聞其詳千里之外、足以興起頑□。吾邦為學者亦一從程朱以為規矩。今陳吾邦諸儒所以為學者、敢具高明。吾邦千數百年前貴邦人王仁者來、授論語於帝子。此吾邦誦華書之始也。然則貴邦是吾邦儒術之所從來也。嘗聞王仁事蹟於貴邦史籍無所見焉、果然否。吾邦中世有菅家・江家・紀氏・都氏等博涉經史、善屬文辭、先是有吉備大臣・阿倍仲麿者皆入唐朝、播芳名於異域。又五百余年前、有船橋頼業者表章學庸於載記中、以奏進于朝廷。此與程夫子同時者也。時運之啓昌、異域一轍、暗合者可謂奇也。然誦程朱書、知聖學之正流、則纔百有余年而已。蓋二百年前一条撰政兼良公博學強記多所著、間取用朱子說矣。朱夫子之言見本邦書篇始此。然此時兵革屢起、文學之士多隱避焉。百年已來太平化行、文明日盛、洙泗濂洛閩閩之遺言、家伝戸誦。惺窩先生藤斂夫始興材、祭酒之祖道春及尺五松永昌三等受其業大鳴。吾國順庵木貞幹・鶴山野節等又出於二先生門而順庵尤傑出、於群儒中所謂青於藍者也。京師人山崎闇齋・中村惕齋・米川毅齋・藤井懶齋等尤尊信程朱倡導門人。本州貝原益軒篤信深崇程朱精明經義。今齡八十有二、所著書百有餘種、雖京師儒輩亦推尚稱先生。如其他諸儒不可殫舉也。此不敢歷陳吾邦人物、以耀其美矣。聊以応清問且述程朱之緒、余盛伝於吾邦欲其樂斯道之流行耳。僕夙受業於益軒之門、然愧庸愚之才不得開明、柔儒之質難於變化、只恐與草木同枯落耳。然好賢之良心未嘗息、幸遇異方君子、連會加密。伏希蒙矜愚之隻言、庶幾得進修之一益、萬々莫吝教、伏祈蒞鑒。

辛卯仲秋

〔筭記〕日本の儒学の歴史と日本朱子学の系譜を説く。春庵は船橋頼業が『礼記』から『大学』、『中庸』を独立させたと、中国との同時代性を説く。実は日宋貿易を通じ宋学（『大学』、『中庸』を独立させた）が先に伝播していたのが歴史的事実であるが、春庵の主張に日本儒学の伝統への矜持を読み取ることができる。

### 1.12. 9月1日 福岡帰着

（1）『正徳元辛卯年 朝鮮人來聘記 卷之二』（福岡地方史研究会古文書を読む会『福岡藩朝鮮通信使記録（一）』p.165, 1993年）

一 正大夫初総戻り、九月朔日

一 吉左衛門・太郎右衛門其外跡立之面々、九月二日福岡戻り。

〔筭記〕往路は7月24日の惣渡で出発していることから、竹田春庵の藍島からの戻りも、9月1日の総戻りで帰着したと思われる。『藍島記』には藍島からの戻りの記事がない。

### 1.13. 9月14日

(1) 『藍島記』9月14日

貞谷筆談平次へ遣。…

〔筭記〕『藍島倭韓筆語唱和』には貞谷との筆談は採用されていない。想像するに8月24日に行われた横田誠齋と李貞谷との書法に関する筆談であろうが、現存しない。

### 1.14. 10月6日 春庵、往路の唱和集を益軒に送る

(1) 「竹田春庵日記 正徳元年日記」10月6日

和韓筆語 〔割注 一部ハ正休、一部ハ先生〕遣。

〔筭記〕川添昭二（1984）（下）p.373に翻刻。春庵は、まずは往路の詩文を整理し益軒に送ったものと思われる。その返事が次の書簡。

### 1.15. 10月7日 益軒、和韓唱和を受け取る

(1) 県15-834「益軒書簡」

一 藍島和韓唱和一冊御越被成采納仕候。再覧仕候而返進可仕候。…

十月七日

〔筭記〕井上忠（1959）p.125～126に翻刻。井上氏は「元禄末年以降」に分類しているが、この益軒書簡の下略部分には、年末までに新君（黒田宣政）が国入りすることについて述べていることから、正徳元年とするほうが良い。

### 1.16. 12月14日 益軒、春庵に復路の応接のため何時藍島に渡るか尋ねる

(1) 県23-928「益軒書簡」

…韓客帰歳（以？）後承度候。定而帰期可未詳候。臘前御越被成候はば御辛苦千万存候。…

一 藍島へとかく為御用心定而早く御越被成候而御座候や。いつ比御越可被成候や承度候。手前より遣申候筆談は又百なりとも頼書事候か。貞之進殿藍島へ御渡被成候はば頼候而於藍島御書被下候様にも成可申候や。左候はば草稿仕可進之候や。御示諭被成可被下候 以上  
季冬十四日

〔筭記〕井上忠（1959）p.119～120に翻刻。井上氏は元禄15年ごろの書簡とするが、復路について未定という内容から、正徳元（1711）年12月の書簡とする方がよい。『竹田春庵日記』が正徳2年分を欠き正確な藍島入りの月日が特定できないが、『朝鮮人帰国之記録』（巻の四、『福岡藩朝鮮通信使記録』7, p.155, 1997）には12月24日～27日に「御役人中藍島渡海」とあり、竹田春庵もこのころに時藍島に渡ったと思われる。 (待続)

## 注

(1) 今回用いた諸賢の先行研究は以下の通り。

井上忠 (1959) 『益軒資料五 書簡集 (下)』 (九州史料刊行会編, 昭和34年7月)

荒木見悟・井上忠 (1970) 『貝原益軒 室鳩巢 日本思想大系34』 (岩波書店, 1970年)

川添昭二 (1984)・福岡古文書を読む会 『新訂黒田家譜附録第七卷 (中)』 (『書簡』 昭和59年3月, 文献出版, p.351~372)

川添昭二 (1984)・福岡古文書を読む会 『新訂黒田家譜附録第七卷 (下)』 (『藍島記』, 昭和59年3月, 文献出版, p.345~373)

高橋昌彦 (2008) 「朝鮮通信使唱和集目録稿 (一)」 (福岡大学 『福岡大学研究部論集』 6巻8号)

高橋昌彦 (2009) 「朝鮮通信使唱和集目録稿 (二)」 (福岡大学 『福岡大学研究部論集』 9巻1号)

高橋昌彦 (2011) 「福岡藩と通信使」 (『東方学志』 153号)

大庭卓也 (2002) 「福岡藩儒竹田春庵と朝鮮通信使」 (九州大学国語国文学会 『語文研究』 第93号, 平成14年, p.14-24)

大庭卓也 (2006) 「西日本に残されたる朝鮮通信使自筆資料」 (国立国文学研究資料館 『国文学研究資料館紀要』 第32号, 文学研究篇, 平成18年2月)

大庭卓也 (2009) 「竹田春庵資料の新検討」 (川平敏文, 大庭卓也 『福岡藩儒竹田春庵宛書簡集』, 雅俗の会, 平成21年5月, p.120~p.136)

\* 本研究はJSPS科研費JP22K00048の助成を受けた成果の一部である。